

今月の逸品

NO. 74 2025. 10～2025. 12

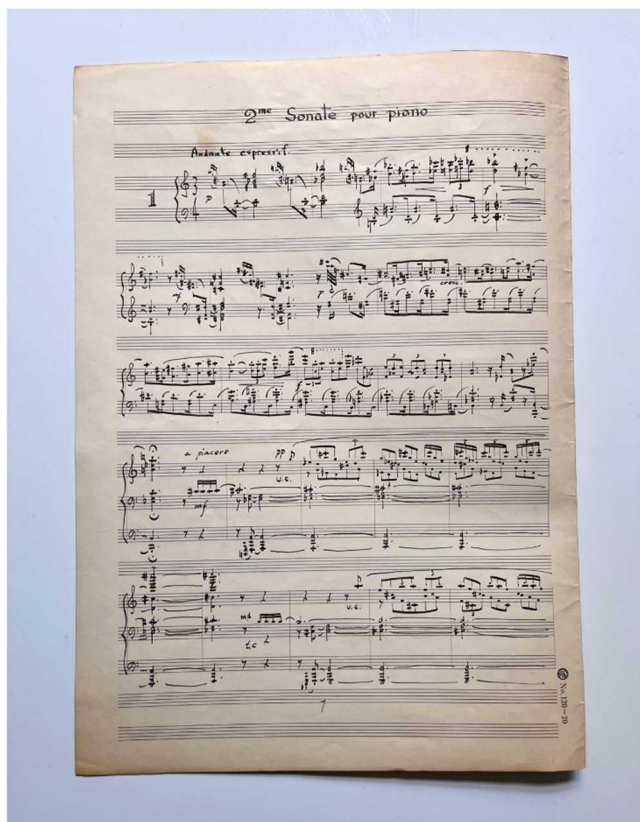
京都市伏見区深草藤森町1

☎ : 075-644-8537

✉ : manabi@kyokyo-u.ac.jp



MUSEUM OF EDUCATION



ふじしままさひさ
「藤島昌壽名誉教授関連資料
《ピアノ・ソナタ第2番》浄書譜」

(横 268mm 縦 376mm)

2025年に教育資料館へ収蔵された「藤島昌壽名誉教授関連資料」は、ご遺族から寄贈された作曲関連資料の一部です。同年3月、音楽科では保管する必要があると考えられる資料を分類しました。作曲家や作品を研究するうえで重要な資料となり得る楽譜やスケッチ、演奏会のプログラム等がこれにあたります。浄書譜の中から、今回は《ピアノ・ソナタ第2番》を取り上げます。本人の曲目解説によれば、この楽曲は「1977年夏に作曲され、翌年春、京都教育大学音楽科を卒業していった一学生によって学内で初演された」¹という、本学ともつながりの深い一曲です。

浄書譜とは、読みやすいように表記を整えた楽譜のことです。現代ではソフトを使ったデジタルな浄

書が一般的ですが、かつては手書きの浄書が数多くありました。絵面、という言葉があるように、楽譜には譜づら（譜面づら、とも言います）という言葉があります。楽譜は音楽を記録したものの総称ですが、ジャンルや時代、国、作曲家（あるいは記録者）によって固有の譜づらがあり、絵を眺めるように楽譜を楽しむこともできます。

この曲が作られた1970年代、音楽のあらゆる要素を緻密に書き込み尽くす複雑な楽譜（ヨーロッパの前衛音楽）や、ときには短い言葉を「楽譜」として提示するもの（アメリカの実験音楽）がありました。この楽譜はそのいずれでもなく、むしろドビュッシーなどのフランス近代の書法に近い印象を受けます。たとえばタイトルや楽語に見られるフランス語表記や、下半分にあるように3つの五線をひとつにまとめて、音楽を複層的に示す書法などがその理由です。氏が師事した池内友次郎^{いけのうちともじろう}、矢代秋雄^{やしろあきお}はいずれもパリでエクリチュール（和声法や対位法、管弦楽法などの作曲技法）を学んでおり、その薫陶を楽譜からも見取ることができます。

出版以前の浄書は作曲者本人が担うことが多いですが、1970年代当時は作曲家志望の学生や弟子が担当することもあったそうです。90年代に藤島氏に師事した方々に今回の浄書譜を確認してもらったところ「氏の筆跡と比較した場合、音部記号の書き方に共通点が見られる。本人の可能性が高いものの断言はできない」とのことでした。今後さらなる研究が待たれますが、まずは現物の浄書譜が伝える生き生きとした筆跡を、ぜひ感じてみてください。

執筆者：増田真結（音楽科准教授）

¹ 藤島昌壽ほか「三人展 第2回作品発表会」演奏会パンフレット、1981年。

※附属図書館で展示しています。